

兵庫縣の風景

神戸 津 川 清 造

兵庫縣の風光それには餘り感心出來ず候、然しその感心出來ざる裡にも感心致す處も有之候へば、

有名なる舞子濱は東海道線（或は山陽線か）で下車せられれば宜敷候、夏期の避暑よりも此邊一體は冬期の避寒には好適の地と思はれ候、後に中國山脈を負ひ、前に瀬戸内海を控へ、南に淡路島を望み、實に山海の勝共に備りて極まりなき絶景の地に候、晴天には淡路島あまりに近く餘りに明瞭なるが故に、寫生には不適當と存じ候、曇天の波荒き時、淡く村落森林の點々せるを眺むる時が好き様に感ぜられ候、朝夕は白帆入り亂れ中川八郎氏の瀬戸内海その儘にて、後の山に登らば、猶も其の感を高め候、秋は背後の山間に畫題豊富に候、總體に小品的の景色に候、秋の觀月も又た興味多きものに候、老松、それは山上より見るに宜敷く思ひ候。

明石町は、北に丘陵を負ひ南に明石海峡を望み、風光麗しく、人丸神社は停車場の東北にあり、山上よりの眺望は舞子附近に劣らず、松並木街道、内海皆風光佳なり。

「ほのぼのと明石の浦の朝霧に

島かくれ行く舟をしぞ思ふ」

とは人丸の歌として名高きものとか、何にしる絶景と存じ候、明石城の夕も麗しきものにて、松林と天守閣との對照も面白け

れば堀の蓮に夕日の映じ居るも面白き圖に候。

石寶殿、高砂の松、相生の松、片枝の松、書寫山鶴林寺等を一順するを幡州回りといひて、好時季を期してめぐるといふ、されど小生は未だ觀覽せざれば之を説き得ずといへど、加古川沿岸の布局の大なる景は、時々車中より見たること有之候。

舞子驛より北へ二里、太山寺といふ寺あり、山間の寺院にして、附近は勝地に富み、西洋人等の筆を振ふ者多しとかいふことに候。

神戸布引瀧は、小生の朝夕散歩する處にて、神戸にての名勝地に候が、あまり感服致さず候、但し避暑には好適當と存じ候、此處に遊ばるゝ諸氏、吾家を尋れ給はらば有難く存じ候。

摩耶は三宮驛より東北約一里の處にありて、檜杉森々として晝猶暗く、避暑する客もありとか、高さ十八丁、山上に寺院あり、宿も世話するといふことに候。

六甲山は小生未だ登り見ざれど、絶景とかのこと、夏は冷しく、駕籠の設けも有り、冬は氷を製造するが見事なりといふことに候。

有馬町の温泉にて名高きと共に、風景も亦麗しく、夏の避暑秋の紅葉、共に三田停車場をにぎはすのことに候、一夏此處に過せしこと有りしが、なか／＼に忘れ難き處に候ひき。

箕面は縣下唯一の公園にて、瀧は名高きものに候、或時此處にて一畫家に寫生帳を見せてもらひしも、此の公園に候、坂鶴線池田驛より約二里半馬車の設けあり、公園の紅葉麗しく、時には

猿群を見ることも有りとかいふことに候。

寶塚温泉は寶塚驛より數丁にして達す、瀧あり、その武庫川の溪流は實に面白く、スケッチブックは満たさるべく候。

其他、城崎温泉、玄武洞、淡路島等の名勝地多けれど、小生の淺見未だその勝を談る能はず、亦た見聞狭きを以て略すべく候。只拙文を以て、一部たりとも現場を想像するの材料たらばそれにて満足致すべく候。(完)

清水港の附近

在清水 清 茂 生

清水港と申すと、駿河灣内の開港場で、これに付きものは、三保の翠帶と、白扇倒懸の富嶽とであります。

僕は『みづゑ』愛讀者で、また日本水彩畫研究所長野支部の會員でありますが、丁度一月中旬より當地へ参りました、見物やら寫生やらの一二を、申上て見ませう。

江尻停車場にお下りなさると、町續きて當港へ参ります。若し歩むがお骨折れとあれば、江尻から輕便でお出でなさい、三錢で参ります。

江尻及清水附近の海岸には、黒松の林及並木がございまして一寸須磨あたりの、感じを興へます。

一日、僕名にし負ふ三保へと、三脚を携へてやつて参りました。尤も陸續きて歩んでも宜しうございしますが、舟の方が便利なこ

とが多うございします。僕は時間で往復する(三保清水間を)石油發動機船で参りました。

舟中の景中々凡ならずでありますな。附近にある幾多の「アサリ」採りの小舟、一方には築港の浚ひ船などの間を通りぬけて出ますと、右には、一面の海苔そだをへだて、橙綠黃に色どつた西洋風數階建の宗教學校が見えます。これはやはり、三保の一部貝島と申すところにあるので、パッタは三保の綠樹、遠くは伊豆の淡紫連峯、よく言ふとまあ龍宮ですな。左は千波萬波をへだて、清見寺山薩陞山を前にして、千古に美容を誇る富嶽、小にしては駿河灣の王者、大にしては東邦の靈峯、軍艦汽船が其間に黒烟を吐くのも、亦近代的であしくはございません。十五分間にして三保の本村へ着きます。

白砂青松と申せば、須磨明石を聯想いたしますが、三保は紫砂青松でございします。まづ三保の眞先き向つて、歩を移しました。が、さすがに、信州あたりとは氣温が異なりますな。一月下旬はばりは既に空に美音を放つてゐるではありませんか。又豌豆の二三尺にもなつて白い花を點じて居るにも驚きました、さて松樹の間をうねつて海岸へと出ますと、誠に、大下先生の、常に好んで畫題に上せらるゝ漁舟の有様、如何にもと思はれました。其平らかなる海、之れも先生の畫に見るところです。そして富嶽は呼べば答へんの風情に見えます。次第に歩を外海の方に轉ずるに連れて、波際次第に荒らく、紫色の小石の濱に、ざわんざわんと打ち寄する白波、清水港あたりの、あまり靜かな海を